愛について

芹澤光治良

只今私は病気をしておりまして、愛について、若い諸君に語るにしても、理論的に話すのが、苦痛な状態です。ですから、おゆるしをいただいて、私小説家のような発想法に従って、私の体験などを語って、諸君自身、愛について考えてもらえたら幸いです。

そうですね、諸君ぐらいの年齢の時、私は何をしていたろうか、田舎の中学生でした。……私は駿河湾にのぞんだ貧しい漁村で、父母から離れて、零細漁民の家に育てられました。その漁村では、小学校へ、みな、はだしで通学して、西風が吹いて出漁できない冬の三四ヵ月は、大半の学童が弁当を持たないで登校し、お弁当の時間には、井戸水を飲んで我慢している状態でした。私もその一人でした。全く野蛮人のような小学生でした。小学校を卒えたら、漁師になるはずでしたのに、好学心に燃えていた私は、偶然なことから、幸運にも中学校に進学したが、その漁村では、それまでに漁師の家から中学に入学した者がなかったので、私は中学生になったという、ただそれだけのことで、村八分のような扱いを受けました。村の人々から白眼視され、うしろ指をさされ、挨拶しても返事をかえしてくれる者もない有様でした。

中学校の五年間、私はその貧しい漁村の貧しい家で、誰からも相手にされず、理解されないで、孤独な毎日をくらしました。自分が孤独だということを、身にしみて知りました。もっとも、どんな平和な幸福な境遇に生まれ育っても、人間は本来孤独なもので、誰でも少年期を脱して、自己に目覚める頃になると、人間が孤独なものであること、自分が孤独であることに、気がつくものです。しかし、私の場合は、内部からの目覚めによって、孤独を感じたのではなく、外から日常生活の些細な事で、孤独をいやになるほど知らされたのです……。

私は村の人々から相手にされないから、村にいる時には、いつも自然のふところにかくれました。落着いて勉強する部屋も身体を休める場所もなかったからでもあります。私の村には海や川や山があって、自然に恵まれていました。村の人々の目を逃れるようにして、私は荒涼とした浜辺を歩いたり、山径を登ったりして、遊び呆けもしたが、また、いつか海の音や風の声に耳を傾け、空を仰ぎ、草木の語ってくれることを、さぐるようにもなりました。言葉をかえれば、私は孤独であったから、自然を愛するようになったのです。自然のなかに、自分を投入したのです。自分を自然のなかに投入すると、自然は多くのことを私に開いてみせ、私を慰めてくれました。

もちろん、その時、中学校は私にとって、楽園に感じられました。学校では誰からも厄介者扱いをうけないし、白眼視もされない上に、同じように学んだり遊んだりする仲間がたくさんおって、勉強する机もあり、身体を横たえる草原の運動場などがあったからです。ともに学ぶ仲間のなかには貧しいということで、私を軽蔑

する者もあったが、しかし、自然や文学などに関して、同じ趣味を持つ仲間がおって、こんな仲間と初めて友情を持つことができたからです。同じ趣味について話しあえる友があるということが、どんなに孤独な私を慰めたか知れません。友情――これは愛の第一歩でしょう。

中学生の頃、私には特殊な事情で――毎月学費として、三円の為替を送ってくれる海軍の軍人がありました。その為替のおかげで、私は中学校生活をつづけることができたのですが、その軍人には、めったに会えなかったけれど、私はこの人に感謝するというよりも、親にすてられたせいか、この人をまるで父親のように慕って成績表や図画や作文なども送り、よく手紙を書きました。筆無精な軍人で、時たま、エハガキで短い返事をくれるだけでしたが、私は少年らしい心のまことを、この人につくしました。この軍人が現実的には、どんな人であったにしろ、私にとっては、神からつかわされた使者のように、尊い人のように感じられ、この人のことを思うと、いつも胸があつくなり、勇気が出ました。私は親の愛は知らなかったが、この軍人に対する愛情によって、子としての愛を体験しました。この軍人は、私に中学校に進学をすることをすすめて、約束どおり五カ年の間、毎月三円の為替を送ってくれて、将来は大学で学ぶように激励してくれましたが、それに対して、私にはなんの注文もしませんでしたし、何等むくいを求めませんでした。全く無償の行為でした。無償の愛から、してくれたことでした。是こそ父性愛のようなものだと思います。

この軍人にめぐりあったおかげで、私は漁師にならないですんだばかりでなく、その後、絶望的な困難にぶつかり、どうにもならないような場合にも、この人のことを想うことで、勇気を出したものです。その点からも、無償の愛がどんなに力強いか解りますが、この人から、私は親の愛を教えられました。

中学校を卒業して、一年間、私は隣りの町の小学校で代用教員をしてから、東京の第一高等学校――今の東大の教養学部に入学しました。この一高は皆寄宿制度で、三年間生徒はみな寄宿寮で暮さなければならなかったのです。この三年間は、普通、大学に入学する時の入学試験の心配する者もなく、ほんとうの意味で青春をたのしみ、自由に勉強して将来自分の能力を発揮するために、準備のできる期間でした。みな寄宿寮にはいるということは、自分の家庭や自分の属する社会層からはなれて、純粋に一人の人間、一人の学生として生活することを意味したので、貧しい人も、富む人も、偏見をなくして、おたがいに仲間として、同志としてつきあえました。この寮生活で、私ははじめて、中学校時代の孤独を脱して、仲間とともに生きる喜びを発見しました。

日本全国から、この一高に集った若い人々は、真理を探究しようとか、日本の将来に貢献しようとか、皆同じ理想に燃えていました。同じ希望に胸をふくらませていました。ですからたがいに手を握りあおうという熱情をいだいていました。こうした環境にあると、人間は一般に友情にめぐまれます。――その頃の一高では、弁論部などでも、さかんに友情論がとなえられていたが、みな同じ理想のために、はげましあい、中学生時代の友達とはちがった協力をし、生涯はなれないような立派な友達が幾人もできました。そして、友達が多ければ、それだけ自分の生活が豊富になり、自己が拡大されて、幸福を感じました。友情には独占するエゴイズムが働かないからでしょう。

第一高等学校から、私は今の東大の経済学部に通学しました。大学に入学した前後に、一人

の女性を知りましたが、その人を、かりにA子と呼びましょう。私は一高時代も大学時代も、学費がなかったために、所謂アルバイトもさかんにしましたが、また、多くの人の世話にもなりました。学費について、私はA子の家庭から、多少援助を受けていました。A子のお母さんから信頼されて、女子大の生徒であるA子を知ったのです。知ったと言っても、たまにその家を訪ねた時に、他の家族といっしょにA子に会うだけで、話題も、学校の話、読んだ書物についての話ぐらいでした。そのうちに、読書した書物の思想などを語りあうような手紙の往復がはじまりました。A子はお母さんから友達になってもいいという許可があって、私を友達として交際したようですが、私も一高時代の友達と同じつもりで、文通をしていました。実際、A子は一高時代の友人と同じぐらいに聡明で、知識慾があり、あらゆる問題について語り、同じ理想を持っていたので、私はA子が女性であることを忘れていました。しかし、一年も交際しているうちに、私はA子に友情の他に、ちがった愛情を抱いている自分を発見しました。これが恋というものではなかろうかと疑うほど、切なくA子を想うことがあったのです。

恋愛というのは、その相手とともにあることにしか、幸福がないように感じさせます。相手を独占しなければいられない愛情だからですが、それだから、私は結婚を前提にしないで、恋愛を考えることができなかったのです。私はA子と結婚したいと切望しました。A子と結婚できるか、しばしば反省しました。しかし、A子に較べて自分を観ると、A子に価しない自分だけがはっきりしました。先ずA子の家庭ですが、父は繁栄している工場を持つ企業家で、趣味の豊かな幸福そうな金持です。A子はまた美しく才たけて、欠点のない人です。それに反して、私は貧乏な漁師の子——というよりも、まるで孤児のような男です。健康も体格も、幼い頃、欠食児童のように野蛮な生活をして、栄養がとれなかったために、貧弱です。ただ、好学心が強く、頭脳がいいと言っても、それが私の将来を、どれほど保証するか、見とおしがつきません。

従って、私はA子と結婚できる自信がありませんでした。結婚してA子を幸福にできる自信がありませんでした。それならA子を忘れればいいのですが、どう反省しても、A子を愛する情は、つのるばかりでした。恋愛というのは理性では消すことのできないものです。

しかし、私はA子を幸福にできないと思うから、どんなに苦しくても、A子に愛を打ちあけることは、してはならないと決心して、実行しました。あくまでA子とは友達だと、自分に言い聞かせ、A子にも友達だという態度をくずしませんでした。しかし、私は独り悩みましたが、その悩みのなかで、自分をA子に価する人間になることで、愛も成就できるかも知れないと、仄かな希望をいだいて、勉強しました。私としては、勉強して、A子を幸福にできるような人間になる以外になかったのです。

当時、東大に学んでいれば、将来社会的地位も得られるし、その手取り早い方法は、文官試験を受けて、官界に出ることだと考えられました。それ故、私は難関中の難関だと言われた高等文官試験を、在学中に受けて及第するほどの勉強をしました。

その頃、東大の経済学部に森戸事件がありました。森戸助教授が学部の機関雑誌にクロポトキンの思想について書いた論文が、朝憲紊乱罪に問われて、大きな社会問題になりました。その前後、私はA子の家でクロポトキンの書物を読むように、A子にすすめたことがあり、A子

はクロポトキンの自叙伝を読んで、冒険小説のように面白かったと話したことがあります。森戸事件は、東京の知識階級の家庭では、どこでも、家庭の問題になったが、A子の家庭でも問題にしたらしく、その時、かつて私がA子にクロポトキンを読むようにすすめたことが問題になって、A子の父は、私が社会主義者だと断定したようです。当時は、第一次世界戦争の影響で、デモクラシーの思想が日本を風靡し、労働運動がさかんになって、A子の父の工場にも、罷業が起きたりして、A子の父は労働問題で、はじめて苦労を体験している頃でした。労働者の正当の要求を、主義者の煽動だとして、社会主義を蛇蝎のように怖れ嫌悪したようです。貧乏人で頭のいい男は正義心が強くて、融通がきかないために、主義者になると考えて、A子の父は、わけもなく、私が家庭に出入りすることを禁じ、A子にも文通を禁じました。或いは、A子の父は、娘が私を愛していることに気付いて、こんな貧乏な青年と結婚するようになっては、たいへんだとあわてたのかも知れません。私が彼女をだましていたと、A子の父はずっと後になっても、私を非難しましたから。それはともかく、私とA子は文通さえもできなくなって、初めて、友達ではなくて、たがいに愛していたことを、はっきり意識しました。A子は女子大を出ると、結婚をすすめる父から逃れるためにドイツに留学しました。私も役所に勤めて、A子の両親からゆるされる日を待ちました。ベルリンと東京で、私達は手紙を書きあいましたが、一年半もして、関東の大震災が私達の愛を動揺させました。A子の父が家も工場もすべてを失なって、不幸になったことが、A子の心を動かしたです。父のゆるさない恋愛をして留学させてもらっていながら、父を裏切って父のゆるさない人と文通をし、不孝をつづけていたと、A子は遠いベルリンで震災の報を聞いてから、激しく自分の不孝が責められたようです。それと同時に、両親に孝行したいと考えたのでしょう。孝行するのには、父の反対する私をすてて、父の喜ぶ結婚をするよりなかったのです。東京とベルリンの距離は今日とはちがって遠く、手紙でも一月もかかったから、わかれていれば、愛している者の間も誤解が起きます。それから、一年半後、A子はベルリンで、父の喜ぶような将軍の息子の愛にこたえて日本へ帰り、両親の祝福のもとに結婚しました。彼女が最後に残した言葉は、自分が愛したような立派な人間になってくれれば、自分の愛もむくいられるだろうから、それを祈るというようなことでした。現在の若い人々とちがって、長い間命がけで愛しあっても手も握ったことがなく別れてしまいました。そのあとで、私も他の女性と結婚するなり、二人で日本を去ったが、私はA子と結婚していたならば、小説家にはならなかったかも知れません……。

恋愛の苦しみも喜びも、そんなわけで、私は体験しました。恋愛は相手を独占して、相手とともに、新しいものをつくろうとする激しい愛情です。それ故、恋愛は成就して結婚に終ることが、望ましいことであり、それが幸福だと思います。恋愛は、一生の間に、そんなに幾度も恵まれるものでないから、恋愛の場合は、それを大事にして、結婚に終らせるように努力すべきだと思います。恋愛結婚は離婚率が多くて、そのために、結婚は恋愛の墓場という者もありますが、それは、その人の恋愛にも結婚にも、きっとまちがいがあるからだろうと思います。恋愛は相手を独占するエゴイズムの愛情が基調になっていますが、自分を相手に与える——相手に奉仕するような愛情がなければ、ほんとうの恋愛の喜びはありません。

結婚生活もまた、相手をわがものにするが、自分を相手に与えることで成立する愛情がなければ幸福になれません。それ故、結婚生活も、実際は、恋愛の延長であるはずですが、人間は悲しいことに、結婚すると、その途端に、安心して努力を忘れてしまいます。努力をおこたれば、何事によらず、その途端、マンネリズムになり発展がなくなり、つまらなくなるもので、恋愛も結婚もその例外ではありません。それ故に恋愛にも結婚にも日々の努力精進が必要ですし、精進するからこそ、愉しくもあり喜びを新しくするのだと思います。

失恋はもちろん悲しいものだが、絶望することはないでしょう。長い人生に、再び恋愛にめぐまれることがあろうと、悲しみや悩みを堪えなければならないでしょう。失恋したからとて、自殺をしたり、その記憶をまもって、独身で生きるというのは、たった一回しか生まれない自分の一生を大切にしないことで、愛に反することだと思います。失恋の悲しみや悩みのなかで、人間的な宝を自分のものにすることができるのだと、考うべきでしょう。

友情を得、恋愛をし、結婚して、人の親となる——こうした人生において、愛し方がみごとな者と下手な者があります。愛し方の上手下手は、その人間の価値を決定すると、私は思います。愛し方の下手な人は、結局愛することができない人でさえあります。愛することの上手な人が、ほんとうには、愛することのできる人で、そんな人をこそ、友達にも、恋人にも、結婚の相手にも選ぶべきであります。愛することのできる人というのは、相手の身になってみることのできる人です。実に簡単なことのようですが、相手の身になるということは、なかなか困難なことです。努力しなければできません。聖書のなかに、心の貧しい人という言葉があります。そして、このような人は神から愛せられるんだとありますが、相手の身になれる人を、心の貧しい人と言うのでしょう。自分を他人に与えられる人です。どうしたら心の貧しい人になれるか、他人の身になれるか、いろいろの方法もあろうが、最も手近い方法の一つに読書ということがあります。文学を鑑賞する、いい小説を読むというのは、自分をなくして、他人の身になる訓練をすることです。

私は一年間、小学校の先生をしたとお話しましたが、その一年間は、私にとって、初めて他人になってみるということを余儀なくした体験でした。それまで、私は村で誰からも相手にされないで、孤独で、自分の殻に小さく閉じこもっていましたが、私の生徒——小学校の四年生で、五十人ばかりの生徒は、私を先生としてあがめ、その孤独の殻から、私を引っ張り出しました。私は先生として、自分の職分を忠実に果すためには、その生徒の一人一人になってみなければならなかったのです。若くて教えるということに新鮮な義務と喜びとを感じた私は、本気で一人一人の生徒を知ろうとして、生活綴方のような作文を熱心に書かせました。その作文によって、小学生も一人一人の世界を持っていて、そのなかで喜んだり悲しんだりしていることを知りました。そして、私は、手におえないような小学生一人一人を、一つの宇宙のように大切にしなければならないことを知りました。大切にすること、これが愛であることも解りました。

代用教員の一年間の体験で、小学生が一人一人、小宇宙であることを知った私は、それまで私を村八分にして、軽蔑している村の人々を、ちがった目で見るようになりました。村の貧しい生活や、飢えそうにして働いている人々が、胸のせまるように身近く感じられるようになり

ました。私は村の人々から相手にされなくても、この人々の仲間だと、本心で感ずるようになりました。これは私にとっては心の革命のようでした。その点、私は中学校を出たばかりで小学校の先生をしたことを、今なお、ほんとうによかったと考えています。

この心の革命があったおかげで、私はA子との長い恋愛の間も、失恋してからも、相手をも自己をもきずつけないで、そのなかから、立派な宝を拾うこともできたし、その後、外国で結核にかかって、死の危険にさらされたが、その危険をのりこえることもできました。そして、今日、私の作品を読んで、感動して下さる人があれば、それは、この心の革命によるものだと思います。

心の革命と勿体ぶったことを申しますが、他人の身になることを知ったといっても、いいです。それによって、私は自分にふれる人や物すべてを大切にするように努力し心がけるようになりました。言葉をかえれば、接する人や物に自己を投入して、自己を与えることで、自然に、その人やその物のなかに自己を拡げるように努力しています。愛というのは、こういうものではないかと考えます。

かつて中学生の頃、山や海をかけまわり、自分を慰めようとして、自然のなかに自己を投入して行った時、言葉のない自然が、私にその秘密を話しかけたのです。まして人間は、言葉や心を持つものですから、こちらが自己を投げ与えれば、必ず応えてくれます。そこに愛の喜びもあり、愛の奇蹟が起こるのです。

（NHK放送原稿）

（作家）